

謹告

各位の待望されて居りました故本多日生上人御撰述に係る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品が今回百日振りで清朝新活字を用ひて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、前記要品と俱に七月八日御本尊始顯會聖日からお願ち致すやう相成りました。

因に諸製部数が限られし爲め比較的高價となりましたが、此御本尊と要品があれば子々孫々迄も信行上には百パーセント疑ありません。且つ要品には本經祖書要文全部ありますから自家用には勿論布教用にも施本用にも洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰
法華經要品 壹部
並本經祖書 金四拾五錢
要文集

御本尊

大 特別用
中 普通小型佛壇用
小 懷中用

授與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ります。

目次

聖訓摘要	日
日什正師諷誦章講話	生
解説欄	顯
京大問題と共產黨首領轉向に就て	正
價值・存在及淨土	人
杉森氏の倫理學を讀む	
内船から重須へ	
記事	
和村	棍
賀田	木
義迪	生
見雄	顯
三郎	正

○本團報並に各地教信

○寄附團費誌料領收

第三十八年八月號

統

一

財團法人
統
一團發行

一册 金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年 金壹圓貳拾錢(送料共)
一ヶ年 金貳圓貳拾錢(前金之事)

▲御込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和八年六月廿四日印刷納本
昭和八年七月一日發行

(第四百六十號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼 磯部 滿 事
印刷人 鈴木 日 雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都 印 刷 所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番
總替東京九四二〇番

念告

◎法華經講座

八月三日ヨリ九月七日迄暑中休講仕候

◎日曜講演

從來午後二時ヨリ奉行罷在候處暑中ハ特ニ左記ノ通り變更仕候

毎日曜日晩七時於本部修法後 九時半迄江戸川公園前街頭
布教 (但し雨天は中止)

◎夏期勤行會

自八月三十一日間毎朝五時三十分ヨリ約一時間於本部修法後
至同三十一日間毎朝五時三十分ヨリ約一時間於本部修法後
「法華經要品」拜講

財團 統一 團

暑中御見舞申上候

昭和八年盛夏

財團法人統一團

幹部一同

統一編輯部

同人

聖訓摘要

日生上人

阿佛房御返事

これは簡單なもので別に申上げる事はありません。

南條殿御返事

これも別に摘出する事はありません。

孟蘭盆御書

この孟蘭盆御書は、孟蘭盆の起源のことなどに就いて目連尊者の話が精しく書かれて居りますが、その事は略して置きまして、その終ひの所に

智慧は牛馬に類し、威儀は猿猴に似て候へども、あをぐ所は釋迦佛、信する法は法華經なり。例せば蛇の珠をにぎり龍の舍利を戴くが如し。藤は松にかゝりて千尋をよぢ、鶴は羽を待みて萬里をかける。これは自身力にはあらず。治部房も又かくの如し、我が身は藤の如くなれども法華經の松にかゝり

て妙覺の山にも登りなん、一乘の羽をたのみて寂光の空にもかけりぬべし、此の羽を以て父母祖父
祖母乃至七代の末までも弔らうべき僧なり、あはれいみじき御實は持たせ給ひておはします女人かな、
彼の龍女は珠を捧げて佛と成り給ふ、此の女人は孫を法華經の行者となして導かれさせ給ふべし。

(維摩經文錄)
一五九九

これは法華行者の信念が能く現はれて居る、自分の智慧は愚かにして牛馬のやうであらうとも、威儀
作法の缺けて居る所は猿に似て居るやうな者であつても、真心を籠めて釋迦牟尼佛を仰ぎ法華經を信す
るといふ。この釋尊を戴き法華經を信するならば、恰かも蛇が珠を掌り、龍が佛様の御舍利を戴いて居
るやうな譯で、實に有難い事である。又譬へて見れば藤は自分自身では上に登る力が無くとも、松の木
に絡まつて行けば千尋の高きに登ることが出来る、鶴は羽を切つてしまへば飛ぶことが出来ぬけれども
羽を待めば萬里をかけることが出来る。その通りに法華經の力、釋迦牟尼佛の力を以つての故に我等行
者は助かる譯である、自分が助かるばかりではない、先祖をも助ける力があるのである。今度あなたは
お孫さんを法華經の行者となさつて出家せしめ給ふたといふので、その事を日蓮聖人が褒められて、法
華經の提婆品に依れば、龍女は珠を捧げて佛に成つたが、あなたは孫を法華經の行者として、それに導
かれ給ふ譯であると仰せられた。この中に信仰の意味合として、殊に「仰ぐ所は釋迦佛、信する法は法
華經」といふ言葉が洵に簡單にして宜しいのである、今の法華宗は唯だ法華々々といつて蛙を拜んだり

狸を拜んだりするからいけない、そんな物は何時も申す眞言風の法華である、所謂萬有神教的のもので
あつて、最も低級なる者である、眞の法華經は統一神教で、本佛を中心にして其處から絶對無限の作用
を認めるものである。唯だ蛙でも蛇でも蝸螺でも何でも宜い、澤山集めて置けといふのがこれが眞言の
曼陀羅主義である、今の法華はその主義に墮落して居る、これは佛教學上では癡病の系統と言はれて居
る、身體中何處ともなしに腫物が吹いて來て、終ひにはグズ／＼に崩れて終ふやうな系統である。それ
どこの統一本佛を戴く所の主義とは同一視することは出来ない、同じ題目、南無妙法蓮華經を言ふて居
つても、その癡病系統の萬有神的思想と、一切の宗教の最高點にある統一神の思想とは千萬里の相違が
あるのである。それだけの區別を嘔み別けることも出来ずして、法華の行者ナンといふのは勿體至極も
ないことである。

賴 基 陳 狀

これは日蓮聖人が四條金吾賴基に代つて、賴基の主人江馬殿に提出せられた陳情書でありまして、四
條金吾が主人に差出した陳情書といふのであるけれども、實は日蓮聖人が代つてお筆をお執りになつた
のである。その問題の起りは龍象房といふ坊さんが鎌倉に來て説教をして、法華經の攻撃などを言ひ居
る時に、三位公といふ日蓮聖人のお弟子と四條金吾が一緒になつて説教を聴きに行つた、その席で三位

公がこの龍象房をとつちめて、法論の上でひどくやりこめた。そこで念佛行者が非常に怒みに思ふて、それを江馬殿に讒言をした、四條金吾がいろ／＼亂暴をしたといふやうな嘘の事を申し上げた、そこで江馬殿が怒つて金吾を勘當してしまふといふ事になつた時に、日蓮聖人が代つて筆を執つて江馬殿に差出したのがこの書面である。この中にはいろ／＼大事な事がありますけれども、今は簡単に御紹介をしやうと思ふ。

先づ今の三位公と龍象房の問答の一節で、

法門と申すは人を憚り世を恐れて、佛の説き給ふが如く經文の實義を申さざらん者は愚者の至極なり。智者上人とは覺へ給はず。(龍樹遺文錄)

斯ういふ事を三位公が言つた、これはどういふ譯かといふと、先づ最初に三位公が龍象房に對して「日本にいろ／＼の宗旨があつて、眞言からいへば大日經を除いて他のお經を顯經と言つて、釋迦の所説を悉く淺いものだといつて居る、禪宗からいへば教外別傳と言つて、大日經が來やうが何が來やうがそんなお經などは閑文字ぢやといふ、淨土宗からいへば善いお經ほど難かしい、難かしいのは難行道だといふ、いろ／＼そんな事を言つて居るが、さうして見るとどれが善いか是れが善いか判らなくなるぢやないか、抑々どれが佛の本意か」斯う三位公が一本突き込んだ。所が龍象房は「そんな人の事を彼はいふたならば、一方を褒めれば一方に引かゝる、皆えらい人の言ひ出した事だから、その事に就いては

自分は善惡は言へない」と言つた、そこを三位公が捉へて「善惡は言はれない、唯だお座成的に、あつちでも宜い、こつちでも宜いといふのはそれは不都合である、法門といふものは人を憚り世を恐れて佛の説き給ふが如く、經文の通りを言ふことが出來ないといふやうな者は、實に愚者の至極である、智者上人とは言ふことが出來ぬ、こつちを上げればあつちに引かゝる、あつちを褒めればこつちに差支へるから、お座成的に行かなければならぬといふやうな事では、本常に教を説く人とはいへない」斯う言つた所が、

龍聖人の云く、さる人は末代にはありがたし、我我は世を憚り人を恐るる者にて候。さやうに仰せらるゝ人とても言葉の如くにはよもをはしまし候はじ。(龍樹遺文錄)

斯ういふ事を龍象房が言つた、それはさう行けば本當の事かも知りませんが、左様な者は末代の今日にはあるまい。私はモウ世を憚り人を恐るゝ者で、程よくやつて行きたいと思ふて居る者である。あなたはえらさうに言ふけれども、あなただつて本當にその言葉の通りに行くものではありませんまいと言つたから、そこで三位公は「それは怪しからん事である、私の戴くお師匠様は日蓮聖人である、日蓮聖人が何處が世を憚り人を恐れて説を狂げた人か」といふ所からグン／＼突込んで行つて、「その弟子の末に連なる三位は、やはりお師匠様の精神を受け繼いで居る者である」と大いに氣焰を擧げた、その言葉が此處に現はれて居る。

三位も文永八年九月十二日の勦氣の時は供養の一行にて有りしかば、同罪に行はれて頭を刎ねらるべきにてありしは身命を惜む者にて候かと申されしかば、龍象房口を閉て色を變へ候ひしかば。(文録一六〇)

日蓮聖人のえらいことは無論だけれども、この三位も彼の龍の口の法難の場合にはその一行に加はつて居つた——この事も從來傳へられて居る史實とちよつと變つて居るから、私は特に御紹介するのであるが、唯だ日蓮聖人だけがやられたのでは無い、そのお供の中には弟子も加はつて居つた——そこで日蓮聖人の頭が飛んで、その次には自分も頸切らるゝものぢやと思ふて、三位自身も身命を師匠に捧げてお供をしたと書いてある。その一行の中に加はつて居つた一人である、それが命を惜んで説を二三にする者と言はれるかと言つた、この文は傳記の中に於て大事な事で、唯だ日蓮聖人一人では無かつた、他の者も死を決してお供をした弟子達、信者達があつたことが能く判る譯である。その言葉を聽いて龍象房は一言も返答することが出来ず、顔色を變へて黙り込んでしまつた譯である。

(繪圖遺文録)

智者と申すは、國の危きを諫め、人の邪見を申しとどむるこそ智者にては候なれ。(繪圖遺文録)
本當の智者といふ者は、世を憚り人を恐れて好い加減の事をいふものではない、國家の安危を見て假令自分の身にはどの様な困難が起らうとも、正直に大事を申す者でなくてはならぬ。

法華經を信じ參らせて佛道を願ひ候はむ者の、争か法門の時惡行を企て、惡口を旨とし候べき。

(繪圖遺文録)
一六〇七

これはいろ／＼亂暴をしたといふことの讒言があつたので、それに對して辯明せられたのである。法華經に依つて信心して居る者が、苟くも佛法の大事の法門といふことに就いて龍象房が説教をして居る三位公が質問に立つて居るといふ、この法門の場合に法華の者が煙草盆を投げるとか、そんな亂暴なことをする譯のものではない、何時でも法華宗は正義を以つて闘ふ所のである。この事も今日の人が忘れぬやうにしなければいぬ、法論などといふものは、何でも負けかける方が煙草盆などを投り出すのである。私は度々やつて覺えがある、ドンドコ法華などでも天理教などと法論をやる時分には靜かにやるけれども、本當の者にかゝると旗色が悪くなつて來るものであるから、直に煙草盆などを投り出す、亂暴をやり出す方はどうも其處に本當に筋に合はぬ所があるからやり出すのである。これは私は今日のデモクラシーの運動でもさうだと思ふ。本當に己れの主張が天下を風靡するものならば、暴力に依る必要は無いと思ふ。それが暴力を以つて焼打をやつたり何かしてやらうといふのは、やはりそこに主張の正しからざるものが入つて居ると思ふ。この點に於ては日蓮主義は如何にも宜しいと思ふ、けれども日蓮主義と名乗る者の中にも往々突飛な者があつて、先年も焼打事件の時に南無妙法蓮華經の旗を立て、基督の會堂を焼いたり何かした者があるといふが、斯様な事は洵に吾々の迷惑する事である。又無闇に飛出して人を殺したり、どうも日蓮主義は警戒をしないといふと「飛上り者」といふことになつていか

ん。恰度左様な者と正反對の日蓮主義者の態度が此處に現はれて居る、法華經を信じて佛道を願ふ者がどうして法門の時に亂暴な事をしたたり、悪口などをやるものですか、決して亂暴や悪口などをやる譯のものではない、最も敬虔な態度を持つて居る所の者である。習ひ損ひの日蓮主義といふものは腹の中が空っぽであるから、石油箱を叩いてコリヤ〜といふやうなことをやり出す、あんな事は矯正しなればいかぬ所謂「端正にして威徳あり」といふ事を日蓮主義は理想として居るのであるから、日蓮主義の行動でもやるといふならばやはり肅々として、さうして威儀堂々とやらなければならぬ、さうして萬一大事が起つたならば、腹の中には巖をも通す決心を持つて居らなければならぬ、腹の中が空っぽで表面だけ石油箱を叩いて飛出すやうな、酔ばらいの出来損ひのやうな事は日蓮主義の正反對の態度である。その點には一つ大改革が起らんければならぬと思ふ、今のやうな腐れ法華をその儘に措ては、廣宣流布は逆も難かしい譯である。

其の故は日蓮聖人は御經に説かれてましますが如くば、久成如來の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、五百歳の大導師にて御座候聖人を、頭を刎ねらるべき由の申し狀を書きて殺罪に申し行はれ候ひしが、いかゞ候ひけむ死罪を止めて佐渡の島まで遠流せられ候ひしは、良觀上人の所行に候はずや、其の訴狀は別紙にこれ有り、仰々生草をだに伐るべからずと六齋日夜説法に給はれながら、法華正法を弘むる僧を斷罪に行はるべき旨申し立てらるゝは、自語相違に候はずや如何、此の僧

豈に天魔の入れる僧に候はずや。(縮刷遺文)

これも讀んで判る通り、日蓮聖人が久成如來の御使であり、今日の大導師であるといふことを言はれたので、茲にも明かに釋尊の御使である者を頭を刎ねるといふことは間違つて居るではないかと書かれて居る。さうしてさういふ事の起りは良觀房の讒言に基いたものである、その讒言狀は別紙の通りであるといふので、別紙が添へてあつた譯である、それも今に傳はつて居りますが、その良觀房といふ人は戒律を非常にやかましく言つて、草を踏んでさへもいかぬといふやうなことを言ひながら、法華經を弘める僧を頭を切つてしまへといふやうな事まで讒言するといふのは怪しからぬ譯ぢやといふ事がある、偽善者といふ者は大抵そんなものである、戒律堅固ナンと言つて蕎麥粉を食つて居るといふやうなことを言ふて居る連中は、皆そんなものである、左様なことで本當の道徳が行はれるものではない、能くこの頃「今日蓮」ナンと言つて蕎麥粉を食ふ奴が出て來るけれども、左様な者は到底問題にならぬ者である、それから進んでやはり釋尊の大事な事を四條金吾に代つて日蓮聖人がお書きになつて居る。

所謂今此三界は皆是我有なり其の中の衆生は悉く是れ吾子なり、文の如くば教主釋尊は日本國の一切衆生の父母なり師匠なり主君なり、阿彌陀佛此の三つの義まします、而るに三徳の佛を聞て佗佛を晝夜朝夕に稱名し、六萬八萬の名號を唱へまします、あに不孝の御所作にわたらせ給はずや、彌

陀の願も釋迦如來の説かせ給ひしかども終にくひ返し給ひて唯我一人と定め給ひぬ。其後は全く二人三人と見へ候はず、随つて人にも父母二人無し、何れの經に彌陀は此國の父、何れの論に母たる旨見へて候。觀經等の念佛の法門は法華經を説かせ給はむ爲めの暫くのしつらひなり、塔組まん爲めの足代の如し。(編別遺文録)

これは釋尊の三徳といふ事を擧げて、「唯我一人」と仰せられた釋尊の最後の思想、所謂統一本佛の思想に基いて信仰すべきことを説かれたので、いろいろの方便の教といふものは塔を組む爲めの足代、即ち足場のやうなものである、丸太を組んで足場を拵へてそれから塔を組むやうなもので、塔が出来ればその丸太は外してしまふのである、法華經の塔を組む爲めの方便の教であつたといふ事を仰せられて居るのである。

後生までも随従しまゐらせて、賴基成佛し候はば君をも救ひまゐらせ、君成佛しまさば賴基も助けられ参らせむとこそ存じ候へ。其れに付ひて諸僧の説法を聽聞仕りて何れか成佛の法とうかがひ候處に、日蓮聖人の御房は三界の主、一切衆生の父母、釋迦如來の御使、上行菩薩にて御座候ひける事の法華經に説かれましましけるを信じ参らせたるに候。(編別遺文録)

これは四條金吾賴基の心情を代つて述べられるので、自分は何も悪い積りで日蓮聖人に隨いたのではありませぬ、あなた(主人江馬殿)に忠義を盡して居ります、私は親子二代命を君に参らせたる者であつ

て、あなたの大事な場合には中務一人最後の御供をしてと言ふて、伊豆の國まで御伴をしたことがあります。その事は今引いた文の前の所に詳しく書かれて居るが、去る文永十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時、自分は折節伊豆の國に行つて居りましたが、一大事といふことを聞いて箱根の山を二時間にして馬に乗つて飛び越えて、さうしてあなたの御馬前に出て、一大事の時には命を捨て、君を助けやうとした一人であります、決して君の事を忘れて居る者ではありません。併し人間は一代ばかりではない、あなたも壽命盡きては逝去れになるでせう、賴基も死んで参る身であるから、死んだ先まで地獄にお墮ちになるやうなことがあつてはならぬから、忠義の外に信心といふことをして置かなければならぬと思ふて、いろいろ説教を聴きました。所がその中で法華經の教が一番善いと見定めをつけたのであります、釋迦如來は一切衆生の爲めには主師親の三徳をお具へなさつて居る、その釋尊からの御使として上行菩薩がお出ましになつたのである、その上行菩薩の再身日蓮聖人ちやと見定めをつけて、賴基は之れを信じて居るのであります。——これは日蓮聖人が賴基に代つて自分でお書きになつたのであります、茲に至つては上行の自覺といふことが最も明かな事になつて居るのであります。さうしてこの文にもある通り「釋迦如來の御使 上行菩薩にて御座候」といふ之れを何處までも忘れぬやうにしなければならぬのであります。それからその次にもやはりその事を仰しやつて居る。

良觀房が讒訴に依りて釋迦如來の御使日蓮聖人を流罪し奉りしかば云々。(編別遺文録)

やはり釋迦如來の御使である日蓮聖人を流すと書かれて、前にいふ 天皇の勅使を侮辱するやうな意味の事をするから、いろ／＼の災難も起るのであるといふことを仰せられて居る。

四條金吾殿御返事

これもやはり前の御書と續きの意味になつて居りますが、四條金吾にお與へになつたものであり度々の難二箇度の御勸氣に 志を現はし給ふだにも不思議なるに、斯く威さるるに二所の所領を捨てて法華經を信じ通すべしと御起請候事、いかにもと申す計りなし、普賢、文殊等なほ末代はいかんがと佛思召して、妙法蓮華經の五字をば地涌千界の上首上行等の四人にこそ仰せつけられて候へ、唯事の心を案するに、日蓮が道を助けんと上行菩薩貴邊の御身に入りかはらせ給へるか、又教主釋尊の御計ひか。(繪圖遺文錄)

あなたは日蓮が大事の法難の時分に特別な志を現はして下さつた、それは龍の口の時分にも、佐渡流罪の場合にも、四條金吾は非常に日蓮聖人を助けたのでありますが、そのみならず自分が今迄武士として有つて居つた所の領分の土地を、主人江馬殿が怒つて、日蓮聖人に對する信心を廢めなければ領分を取上げてしまふといふことになつた時に、四條金吾は、法華經の御布施と考へて勇ましく所領を召し奪られても少しも悔むことはありませんといふ起請の一札を書いて出した、その決心は如何にも立派

なことであつた、普賢菩薩、文殊菩薩でさへも末法には法華經に傷をつけなはいふことは難かしいと釋尊が思召して、本化の菩薩を喚出されて末法の弘通を付囑せられた譯である。所があなたは斯の如き堅固な信仰を以つて何處までも法を護り、道にしたがふ態度を以つて日蓮を導いて下される譯である。日蓮は固よりさやうに決心して、法は重い身は軽いと覺悟して居るけれども、附き添ふ信者の四條金吾が尚ほ勇ましく、法難の場合には腹うち寛げて、日蓮聖人の頸が飛んだならば金吾は直ちに御伴をする主人から領分を奪らるゝといへば欣んで法華經の御布施として差出すといふやうにやつて呉れるから、その師匠たる日蓮がマゴ／＼しては居れぬぢやないか。斯様に日蓮を鞭撻するやうにやつて呉れるのはこれは四條金吾の心に行菩薩が宿つてお居でになるのか、釋迦如來の御計らひとしてあなたがさういふ強硬な態度に出られるやうにあるのか、如何にも有難い事ぢやといふて、お禮を言ふて居られるのである。

如何なる乞食には成るとも法華經に傷をつけ給ふべからず、されば同くは歎きたる氣色なくて、此の狀に書きたるが如く少しも語はず振舞仰せあるべし。(繪圖遺文錄)

これはどういふ事かといふと、あなたが手紙を遣されたのを見ると、主人から領分を奪られるに就ては少しもマゴ／＼しない、假令乞食になつても法華經には傷をつけ申す間敷といふ起請文である。これは洵に結構な心懸けであるが、併しその決心をしたからといふても、その家を離れて出る時分に、女房

の手を引いて住み馴れた家を後にして出て行く場合のその態度が大事ぢや、決心はして居るけれども後を振りかへつてメソソ泣きながら「愈々住み馴れた我家を離れて行かんらんか」さうですネ、信心などした爲めにえらい事になりました」といふやうなことではいかぬ。その決心は立派だが、愈々實行の場合に臨んでその態度が又大事ぢや「同じくは歎きたる氣色なくて」で、心配さうな顔など見せてはいかぬ、法華經の爲めに進み行く信念に依つて勇ましくその家を出て「乞食になつても」といふこの起請文の決心を實行しなければならぬと言はれた、これは非常に大事なことであるから堂々と書く時分には立派に堂々と決心したやうな事を書く、口で言へば何でもないことであるから堂々と書くけれども、さて愈々となるとその堂々が變手古になつて来る、其處が大事な所ぢや。私等も嘗つて宗派の改革に努力した時分には、處分を受けて寺を逐ひ出された事もあるし、大勢同志を率ひて闘つた事もあるけれども、それは事の無い時分、酒でも飲んだ時分には皆元氣で、非常に強さうな事をいつて居るが、愈々實際にぶつかつて来ると皆ヒヨロ／＼する、私が過去の法華經宣傳の歴史の上に現はれたその大勢の友達を今日過去帳で繰つて見ると、大抵は退化の菩薩で、終始一貫するといふことは餘程難かしいものである、又一貫したかと思ふ者は變手古な頑固な者になつて詰らぬ事を言ひ出したりする、それを日蓮聖人は注意せられたのである。手紙に書いて遣した通りにやれ、變らぬと誓つた以上は變らぬやうにやれといふ、其處が日蓮主義である。「今身より佛身に至るまで能く持ち奉る」と何遍も言つて置き

ながら、愈々の時になつて「それは口で言ふただけでござんす」——そんな事の無いやうにやれと言はれるのである。さうして四條金吾は愈々領分を取上げられてしまつたのであります、そこが面白い、その時に日蓮聖人は之れを勵まして

小事こそ善よりは起つて候へ、大事になりぬれば必ず大なる騒ぎが大なる幸となるなり。(楠園遺文錄 一六一九)

と言はれた。これは日蓮主義者が餘程よく考へて置かなければならぬ、小さい事は順調な話で、善い事は善い事から出て来るといふやうな譯である、所が本當の大きな善い事は善い事から出て来ない、災禍の中より幸福が出て来る。これは實に面白い所であるが、本當のえらい人間は順境の内からは出て来ない。古今東西の偉人の傳を讀んで御覽になつたならば、所謂「艱難汝を玉にす」と古人も言つた通りのものである。又孟子であつたか「天の重任を下すや先づその身を苦しむ」と言つて居る通り、本當にえらい人間に天祿を與へんとする時には、天がその人に困難を與へて、さうしてその者を磨くのである人間を本當に磨くには艱難辛苦といふものを以つて磨かなければならぬ、石鹼や糠で洗つたんでは逆も人間といふ者は本當に光つて来ない。であるから本當の幸福といふものは災禍の中、困難の中から出て来る。四條金吾が今度二ヶ所の領分を取上げられて勘當を申附つた、その中から本當の幸福が出て来るこの災禍こそあなたの爲めには大いなる幸福の本ぢやといふことを日蓮聖人が斷言せられた、所が今の法華宗は俗信的であるから「マア——法華の信心さへして居つたならば商賈は繁昌するし、病氣は癒る

し……」そんな事ばかり言つて居るが、この正義を護るが爲めには乞食に成つてもといふ迄貫いて、災禍は却つてその中より大なる幸福が來るといふ、これが日蓮主義である。

この四條金吾の場合にも、段々その結果といふものが先きに行つて現はれて來るのであります。この時には領分を取られてしまつたのでありますけれども、今度はそれが戻つて來る。序ですからその事を書いてある御書を御紹介したいと思ふ、その間に二つ三つの御書がありますが、これは前後して申上げ



(三七頁下欄ヨリ)

無宗教無神論乃至既成品否定を科學的教育として認容するならば、宗教と神と乃至既成品肯定をも同時に認容して然るべしと思ふ。而して現代教育に於ては主として前者をのみ認容し、後者の方は特殊宗教學校に於てのみ之を認容するは既に好惡的偏派的の非科學的態度であると思ふ。

茲に草莽より一言を呈して教を乞ふ次第である。

(完)

日什正師諷誦章講話 (其四)

梶 木 顯 正

十四、常不輕品ノ說相ヲ明ス

引不輕大士之往事、舉而強毒之逆緣、顯逆即是順之圓意。

此の段は常不輕品の意を明されるのである。「引不輕大士之往事」とは、過去に威音王佛といふ佛が法華經を説き給ふて後涅槃し給ふた。

然るにその後一人の行者が出て「我レ深ク汝等ヲ敬フ敢テ輕慢セズ……汝等ハ皆菩薩ノ道ヲ行ジテ當ニ作佛スルコトヲ得ベシ」と往く人、歸る人と人毎に説いて禮拜合掌し盛んに佛教を弘めたのであつた。然るに聞く者の中にはそれを笑ふ者、嘲ける者、瞞る者、打つ者が有つて常に杖木瓦石の雨が降ることは珍らしくなかつた。けれ共この行者は如來の教を信するが故にこの諸難を堪へ忍んで、益々我深敬汝等不敢輕慢云々と説き切つたのであつた。爲に終ひに菩薩の行を積んで今日釋迦牟尼如

來と成る事を得たのである。其時の我れを輕ろしめ打ち据た人々とは、汝等各々であつたのである、と過去の事を引き明すを「往事ヲ引ク」と云ふのである。「面強毒之」とは「不輕大ヲ以テ之ヲ強伏ス」といふ可きを略して云つたので、實大乘の法華經を以つて其人を救濟せんが爲めに強いて教へる、即ち折伏する事を云ふのである。それは丁度親が我子を立派にしたい爲に折檻するのと全く同じである。「逆縁」とは逆らふ者、敵となる者も、如來の眞實教たる法華經に敵となり逆らふのであるから、返つてそれがやがては縁と成つて導かれることとなる。

されば之を逆縁と云ふ「逆即是順」とは正しく教を守り行ふ行人を順縁といふのであるが、如來最後の極説たる法華實大乘に縁を結んでは、逆も順も共に成佛の果報を獲得するので、今はその意味を「逆即チ是レ順ナリ」と云ふ。「圓意」とは法華實大乘は圓教中の最高圓教なればその妙不可思議なる心を顯す處を指したのである。中で一番困るのは反對もしないが、賛成もしない、といふ者である。法華經は絕對善なるが故に賛成し信順した者は勿論救はれるけれども、反對に敵となつて害を加へた者も之れが縁となつて後には救はれる、丁度大地に倒れた者は大地を支持て起きると同様で之れを逆縁と云ふ。この順ふ者、逆ふ者、兩者共に救はれる所に法華の最高圓教たる經力があるのである。この旨を法華經の不輕品は顯すと、御開山は明されたのである。

十五、神力品ノ大意ヲ述ブ

現ニ十種難思之神力ヲ付ニ末法弘通之要法

この文は如來神力品第廿一の大意を述べられたのである。

- 一、如來の御舌が長く現はれる神力(印度では事の眞實を證明するに舌)
- 二、如來の御身より無數の光明を放ち給ふ神力
- 三、如來のセキバラヒし給ふ御聲が法界に響き渡る神力
- 四、如來の指をハヂキ給ふ音が法界に響く神力
- 五、如來が最後の極説たる法華經を説き給ふに依つて大地が震動する神力
- 六、説法聽聞の大家に如來の分身佛を見せしめ給ふ神力
- 七、如來が法華經を説き給へば空中から之れを讚歎し奉るその聲を聞かした給ふ神力
- 八、一會の大家が悉く如來の教を信受し奉つて佛弟子となる偉大な神力
- 九、天より花香瓔珞が散じ來る神力
- 十、十方の世界國土が本佛釋迦如來一佛の國土となるの神力

十種の神力

以上十種の「難思」とは、不可思議といふことで、神通力を如來は現じ給ふて法華經の超勝せること

をお示しになり、更に仰せらるゝには此の經の勝れて居る所以は説き盡し難いのであるが、今之れを要言するならば、如來の一切の覺り給ひし法、如來の持ち給ふ一切無碍の神通力、如來の備へ給ふ一切の御力、如來の行し給ふ甚深の佛事等は皆この法華經の中に宣説し、顯示し給ふ所である、と明し給ふ。即ち大衆の疑念を除いて一大確信に立たしめ給はんが爲に末法弘通の要法を示して信解すべし、受持すべしと念告し給ふのである。是れを「付末法弘通之要法」と仰せられたので、この「要法」とは釋迦如來一代の教法を擣き篩ひ和合して得たる所の法と云ふことで、之れを一言に言へば南無妙法蓮華經といふのである。中には之の要法を本佛といふ佛様である、などと云ふのだが感違ひも此處まで來ると正氣の沙汰とは受取れぬ。そこで之の法を當神力品に來つて本化の四大菩薩に付囑し給ふ。本化の四大菩薩は之れを如來より受け給ふて、滅後末法の迷へる衆生に授與せんと、母の赤兒の口に乳を入れんと勵むが如くに勵み給ふのである。之れが其大意であるが、この法華經の金文に照して、末法惡世に不自惜身命の御弘通を遊ばす日蓮大聖人こそ、本化付囑の上首上行菩薩の再誕なり、と仰せられるのは宜べなる哉である。

十六、本門段ヲ結ス
是、則、本門流通之大法也

これは以上擧げた處の第十五涌出品より第廿一神力品に至るまでの法華本門段をお結びになる御開山のお言葉である。「流通」とは前の迹門段を結ばれる時のお言葉と同様に、本門段全體を首尾一貫して居る大法の相であるとの意である。

第五章

一、要法トハ題目ノ五字ナル事ヲ明ス
其、要法、者所、謂題目、五字是、也

「要法」と云ふ言は前の如來神力品の段でいふ所の如來の一切の覺り給ひし法、如來の持ち給ふ處の一切無碍の神力、如來の備へ給ふ一切の御力、如來の行ひ給ふ甚深の佛事等を云ふのである。更に之れをツツメテ言ふならば、「是好良藥」である。即ち法華經の中に宣示し顯説された「要法其のもの」とは何かと云へば、第十六如來壽量品の中に譬に寄せてお説きになつた、即ち父たる良醫が兒供等に與へんが爲に調製されたる良藥是れである。名前を云へば妙法蓮華經であるが、この妙法蓮華經といふ良藥要法は如來の「根本から持ち給ふ法」である、故に之れを本法といふ、本法とは如來が根本から具備給ふ法と云ふ意味である。でこの良藥要法とは救濟者たる如來が被救濟者たる吾等凡夫に救ひの綱としてお

與へ下すつた御手である。妙法蓮華經とはそれを指す。文字にすれば五字七字となるけれども其の實質は如斯ものである。故に未だ幼稚の吾等衆生はこれを手にシツかり握つて居るならば必ず如來に依つて教はれるのである。深く吾等凡夫は己れの迷ひを斷つて本佛如來の示教を信受し奉らねばならぬ。

一、更ニ題目ヲ釋ス

然 此妙法蓮華經者三諦圓融之法體、性海果分之内證、萬行衆善、之都名、本地甚深之奧藏也

この一段は本佛釋迦如來が本具し給ふ法を擧げて讚歎遊ばされたる文である。「三諦」とは法の數を擧げたので、諦とは眞實といふ意味である。三とは佛教哲學の宇宙の事々物々の相を見る上に取つて居る態度に三ツの見方がある事を云つたので、其の一ツは宇宙の萬物は「空」なり、元をよく正して見るならば無いものである、今有るやうに見えるのは嘘で何も無いと見るのがほんとうだ、と云ふ見方である。第二は空と見るのは嘘で現在既然と萬物は存して居るではないか、空には非ずして「有」と見るのがほんとうであるといふ見方。第三は空と見るのも嘘であり、さうかと云つて又有なりと見るのも誤りである。「有に非ず空に非ず亦は空亦は有にして不可思議體なり」と見ねばならぬ、といふこの三ツの相が各々宇宙萬物の上に即して、「圓融」と云つて、風の空中を自由自在に吹いて何等碍げないが如くに

之の三ツの相は不可思議にも相加はり相通じて何等のサマタゲもなく運び行はれて居るのであるといふ。「法體」とは眞實根本の法の相と云ふことである。「性海果分」とは覺りを開いて御座る佛様といふこと、「内證」とはその佛様の内に持つて御座る「覺りそのもの」といふこと、「萬行」とは吾等が爲には主師親に在ます本佛釋迦如來が衆生濟度の爲に萬づお勵み下さること、「衆善」とは生死を越えて吾等を救はんとお勵み下さる報ひとして積み給ふた如來の功德のことである。「都名」とは其の萬の行ひ衆の積み給ふた功德を、都とは合せ收めると云ふことでスベオサメた處の名であるといふこと。「本地」とは根本とか本元とか云ふことで「甚深之奧藏」とは如來が根本から持つて御座る秘藏の寶藏といふ意である以上妙法蓮華經を法體と言ひ、内證と言ひ、都名と云ひ、奧藏と云ふ、四段の説明に於ける最初の法體と云ふ一段は「三諦圓融之」とある如く、形而上學として宇宙萬法を取り扱ふ哲學上の相であつて、宇宙森羅三千の諸法の上には不可思議にも平等の側と差別の側とが一往は二面各別に行はれて居る如くにして、然かもその二面が有無相通じ不思議一の上に運ばれて行つて居る。その不可思議相の眞實根本體が妙法蓮華經である、と言はれるのである。されば妙法蓮華經とは哲學上に云ふ處の眞理として、宇宙法としての根本源體であるといふのである。然るに次の句に來ると内證、都名、奧藏といふ三段の説明が上の哲學的理法といふ立場とは違つて宗教的果法といふ立場に立つて爲されて居る、即ち教主如來の覺りの内容として眞理たる宇宙法が果法となつて全く功德化されたものとなつて居る。この二ツの頼

向は非常な相違である、一方は冷にして静であるに反し一方は暖にして動である、其の相違は天地雲泥である、が然し何れにしても二者共に法であり理であり功徳珠であつて教主佛如来そのものに在まらぬこと丈は頗る明かなことである。故に次ぎ下の本尊の「本體也」と下し玉ふ御開山の斷案は、哲學的立場から本尊觀の上を下されたる斷案であることは明瞭である。

三、迹門ノ意ニ因テ題目ハ本尊ノ本體ナルヲ述ブ

是此本尊之本體也

其處で再びこの斷案に來る前提として掲げられたる前段の妙法蓮華經の内容を明される文を考へてみる。前段の三諦圓融之法體と云ひ、果分之内證と云ひ、衆善之都名と云ひ、本地甚深之奧藏と云ふ何れもは人格的存在ではなくして上にもいふ如く、人格的存在者の抱懐し給ふ内容そのものを指し、又は説明したものであることは以上の文字の義理を見たならば明である。猶今少しく本文に就て見るならば「末法弘通之要法ヲ」とある、この要法とは「如来御自身が教説し給ふた廣範なる法を要の法にまでツマメ上げた經法」と云ふことである。それを五字の題目と云ふのであるから、能證所證といふ上から考へると何うしても題目たる要法は所證であり、其の要法を能證し給ふた人が更に別に在まらねばならぬ道理である。法華經の「毎自作是念以何令衆生」と大慈悲の涙を流して憂懐し給ふ佛様が在まらねば

ならぬ譯けである。若しそれなしとするならば其れは先きにも云ふ如く一遍の理屈であつて斷じて宗教では無い。されば御開山日什聖人がその要法を以つて本尊の本體なりと仰せられたのは前に法華經各品の大意説相を述べられて、それを法華經迹門の經旨から「經理論の歸結」として「本尊の本體也」と斷定されたものだとは予は拜察するのである。その事は更に次ぎ下の「迹佛果成之質也」と遊ばされし文意からしても至極明かに窺ひ得る所である。尙更にその次ぎ下の段で「破迹佛立本佛」と仰せ給ふ意は、上の「迹佛果成之質」たる始成正覺の佛を破して法華本門の經旨を明し給はんが爲の故である。故に御開山の御本意としては下本門段の「應用豎高三世利益横遍十方」と云ふ處に在るのである。一體從來の學者はこの「是此本尊之本體也」と云ふ文を直ちに取つて、顯本教壇の本尊の本體は南無妙法蓮華經の題目也と言つたのは早計であつて、前後文意の關係を忽かにした結果であつたと予は斷じたい。

更にいふならば、御開山聖人が各品の大意を述べ給ふ中に前文の本門段涌出品第十五、第十六壽量品を述べ給ふ場合の「因彌勒不知之疑問ニ顯釋尊久成之遠本ヲ宣ヲ三身即一之應用ヲ顯應點久遠之大悲」と宣ふ時と、今「次本門意者云云」と述べ給ふとを引き比べて考ふるに全く御本意が此處に有る事を確信し得るのである。

前にも言ふが如く實際宗教の本尊として起ら給ふ「本尊の宗教的立場」として、十界互具論からいふ

經理論の歸結として題目が本尊の本體だとの議論は述門の所談としては至極妥當であるが、この場合、「本尊之」と呼ぶに付ては、その本尊といふものと、曼荼羅思想的法華述門の經理の歸結である平等論の思想とは表（體知來）裏（經理論として）一如一體と成つて居るものであることを必ず了解して居らねばならない。故にこの立場に立つならば曼荼羅といふも、本尊といふも、それは一物の二面觀である、然しそれは必ず本尊の主體たる教主如來を信解し認識しての本尊觀からのみ言ひ得る特權であつて、未だこの本尊に對する信解認識を有たざる以前に於ては斷じて之の特權は許さるべきでは無い。言ひ換へるならば法華本門の立場に起つてのみ言ひ得る事であつて述門からは絶対に容れないことである、だから此の本門の一物二面觀と云ふ本尊に對して、觀察者の立場が平等論的經理論的哲學上の立場に立つて云ふならば本尊の本體は妙法蓮華經といふ題目である、と云ふ事になり、それが被救濟者（迷）と救濟者（悟）といふ純宗教的立場に立つて云ふならば、本尊の主體は悟者であり、覺者である處の佛如來である、と云ふ事になるのである。

其處で今御開山はこの法華本門の本尊觀の上に立つて、更に法華述門各品の大意説相を述べて、その一貫せる經理を結ばれる説述上の關係から哲學的述門の歸結として（法華述門は哲學面を説）題目を「本尊之本體也」と遊ばされたのである。

本來本尊とは宗教上に於ては「不可犯にして絕對尊、絕對歸依處」であるから、智的教學論から云つても完全して居らねばならぬのは勿論であるが、更に信仰的宗教の權威から言ふても絕對尊嚴を示すのでなくてはならない、と同時に必ず本尊からは暖い慈悲が溢れ出て居らねばならない、又救ひが下つて居らねばならぬ、故にその本尊の根柢には「絕對ノ悟リ」がなければならぬことはいふまでもないことである、で予は此處で本尊に對する信解の參考として左の二義を指示して置き度い。

一ツは相對的本尊觀——相對的本尊觀とは曼荼羅思想を表とした本尊觀である。（曼荼羅之本尊とは一往異ふべし）之れは法華述門段に於て明す所で、それは全く十界互具一念三千論の上に立つ思想で、從來法華述門談の「汝我等無異」と云つて、救はれる吾等凡夫の人格的價值と救ひ給ふ完全なる悟りの如來の人格の本質とは（表面は迷と悟の區）全然同一平等だと云ふ平等觀の上に立つた本尊觀をいふ、されば此の平等觀の上に立つ哲學的の本尊觀は具體的には曼荼羅思想を以つてのみ現はし得るので従つて相待論であり理論的であることは云ふまでもない。従つて此處には絕對の救ひ絕對の慈悲と云ふものは無いことを知つて居らねばならぬ。（絕對の慈悲と救ひとは云ふ權威は本尊）今本文の「妙法蓮華經は本尊の本體である」との御開山の御言葉は此の立場からの所談であることに注意をせねばならぬ。

その事は本文の前後を見るならば明かである。

二ツは絕對的本尊觀——絕對的本尊觀と云ふのは實際に宗教の本尊として偉大なる悟りを體具し給ひ、絕對の慈悲の上に立つて平等の救濟を施し給ふ主師親三徳の體現者即ち完全圓滿なる救濟主大人格者

を云ふのである。故に前の相待的本尊即ち曼荼羅思想の上に建立せられたる絶対權威の本尊なる事は勿論で、之れを法華經に於て云ふならば蓮門の所談が即ち相待的本尊觀と云ふ曼荼羅思想であり、絕對の本尊觀とは即ち三世に亘つて絕對救護の權威を持つて御座る本門所談の本尊がそれである。

そこで前にも云ふ如く本尊と云ふ場合には救ひが中心であるから「法本尊」と云ふが如き問題は起るべき筈では無いのであるが、上に述べる處の相對論的本尊觀、絕對論的本尊觀といふ學術的見方に重きを置きすぎる結果、實際宗教上の本尊に對して充分なる區別が立たなくなるのである、一體如何なる議論が立つにしても本尊の上に法本尊だの本人本尊だのと云ふ名目を立て呼ぶことが大間違ひである、今日抑誤りの根本となつて居るのは此の名目を容して措いたが爲である、よろしく今後は實際宗教の立場に還つて如斯名目は全廢すべきである。そこで予は「本尊」を信解する上に、古來から日蓮門下では「曼荼羅」と「題目」と「寶塔」と「本尊」との四者の意味が混合に考へられ扱はれて居た點が不可なかつたと思ふ、故に本尊の問題が明瞭を缺くことゝなつて何時も議論が絶えないのだと思はれる、で今それ等を左の項に分て略説することゝしやう。(次續)

★
★
★
★
★



解 放 欄

京大問題と共產黨首領轉向に就て

和 賀 義 見

一
京大問題に就ては可成世論を沸騰させて相當に批判もせられて居るが、今吾人の信念を通して此の問題に對する態度を明確にして置くことの必要を痛感する。

學の自治、研究の自由、學園の權威神聖等の美しい語に依つて欺瞞せられてはならぬ。又不確實なる認識を以て妄りに論を爲すの禍あることをも注意

せねばならない。

人生の事柄は相依相關の理法に依りてのみ存在するのであつて、如何なるものでも孤立を許さない。然るに自治なる語に依つて綜合的、有機的に達成せらるべきものを、殊更にその國家社會から全然切り離して、隔離した處に置かうとするのは、到底不可能のことではなければならぬ。何となれば彼等學徒自らが對社會的關心を有せずその學の研究を爲すことは斷じてあり得ないと同様であるから：
：利へ自由と言ふ語は何を意味するのであるか甚だ不透明な語である。佛陀の教に隨へば吾々の意欲は二方面に働く、一は無明暗黒であり、二は光明を

無明暗黒に向つて緣起する思想行動が自由とせらるれば、それは放逸と名け一切を破壞的のものである。

光明に向つて働きかける自由は解脫と呼ばれて、

眞に解決せられ、束縛より脱し、行く處として開かれざるなき建設の展開を見るのである。科學の研究に衝る人々即ち教授なり學生なりが、その研究に従事しつゝある間に於て、何等かの心の動きを否定し得ざる限りその人々の持つ思想の動向が上述の二者の中何れかを取るの必然であらねばならない。

然るに研究なるものは未だ完成せられて居ないといふ事である、態度が定まつてゐないといふことである、言ひ換へれば有爲流轉の姿である、變化の豫想せられてゐる世界、それは尙無常の法を脱することが出来ぬ、無常遷滅なるが故にその事柄は縛せられてゐるのである。縛られたる生活、繋かれたる境涯には決して自由はあり得ないのである。況んや一切の事柄は、その事柄の存在することに依つて價值があるのではなく、その存在するものが如何に動いてゐるか、如何に働きかけて居るかと言ふことに依つてその價值が創造せらるゝものであると言ふこ

ものを以て自我なりと錯覺するとき一切の進歩發展を阻害し、破壊を見るのである。故に迷の我に固執する態度を否定して無我になるべしと教へ、更に我とは佛性なりと教へて眞の人格の根柢を光顯することを教へてゐるのである。佛性を否定し迷を主張するが如きは恐るべき獨斷顛倒であつて斷じて執るべき態度ではないのである。そして佛敎は人間性を否定してゐるのではなく、その人間性を最も價值あるしめ、永久にして絶大ならしむるの意義がその教ふる處である。

持世經に「大欲を以て一切智を求め(中略)大欲を生じ大慈悲喜捨の心を得んと欲するが故に云々」と言つて、大欲即ち人間の意欲の否定ではなく、その大なる價值創造の意義に顯揚することを教へて一切を清淨化、神聖化することを明示したものである。即ち神聖又は權威とか言ふことは獨斷、無明、放縱等と共にあるのではなく、光明に依る共存の世界、

とを思ふ時、苟も國家の存在を危くするが如き思想革命、共女主義等の共產主義實現に必須なる手段を肯定したと言ふことは、日本國家の存在とその併立を斷じて許さるべきものでない。そしてその事柄に力を共にするといふ騒ぎは、意識してゐると否とに拘らず反國家的であり、無明に緣起せる行動である。涅槃經に「我とは佛性なり」と説かれて居るが、眞の我の實現とは、佛性を顯動することである。即ち如來と共に生くる處に眞の我の世界即ち解脱の境地、自在の天地が開拓せらるゝのである。

同涅槃經に「我を無我想し無我を我想す」と言つて恐るべき顛倒を諷めて居る。我を無我想すとは佛性を否定することである。無我を我想すとは有爲即ち迷を我なりと固執する態度である。佛敎で教ふる無我とは有爲即ち不完全なるものを固執してはならない、迷に執着してはならないといふことである。眞實ならざるものを主張してはならない、未完成の

解脱の道に通じてのみ存在し得ることであらねばならない。

二

佐野、鍋山の共產黨首領が從來把持し來つた思想を清算して明らかにその誤謬であつたことを聲明しその思想轉向を公開したことに依つて左翼の陣營は惨めな憐むべき狼狽を爲し、轉向者を續出して居る人は命の問題を考へた時、眞の我に立ち歸るものである。滿蒙問題を契機として、我國民大家が一切を國家に捧げて悔ひざるの奉行を爲した時、彼等は既に心に動搖を生じつゝあつたのである。彼等が捕縛せられて獄中に投ぜられてゐる間に、他の獄囚の晝夜を忘れ戦需品の製作に献身的に働く純情さを見せられた時、彼等の運動が如何に國民大衆の心を離れてゐるか、又そのイデオロギー實踐に錯誤のありはせぬかといふ疑惑を生じたのであつた。

偶々大乘起信論を見てその人生觀、宇宙觀に於て始めて偉大なものあるに觸るゝに及んで、過去の誤謬を一時に見出したのである。恰も鋭利な双物を以て竹の節を割るに唯一撃を加へたのみで次々の節が自ら割れて行くが如くであつたのであらう。彼等は佛書を見て眞の人間性に觸れんとし、又大家の國民的血汐に燃ゆる姿を見ては、我等の血汐の中に流れてゐる日本民族の持つ何物か、當然呼び出されたことであらう。日本人の持つ東洋文化、高度の文明獨創的な力の禮讚、それ等がもしも過去數年前に彼等に依つて明確にせられて居たならば、斯る不祥の事件を生まず、又彼等も不幸なる囚徒たるの憂き目を見ずに済んだであらう。

然し乍ら此の事に依つて吾々が平生指摘しつゝあつたコミンタインの獨斷、戰敗國の不幸、共產主義はコミンタインの奴隸的機關なること等を正直に告白してゐる、而してツアアリズムと我皇室との

相違を明らかに區別してゐる。然し此に二つの重大なものあることを見逃してはならない。その一つは皇室に對する考方が、單なる氏族制度の上に於て見られるだけでは眞實なる大日本精神に觸れたとは言はれない。日本の持つ偉大なる使命の自覺、而してその使命の實現者としての天皇、並びにその實現の組織的體系の構成分子たる國民、此の三者が全く不可分の間に、而も嚴然たる宗教的道義心の中に生きつゝあるといふこと、事實それである。

日蓮聖人は法華經の精神を以て眞の佛國土を建設すべき任務を擔へる國こそ我神國大日本にして、我天皇は轉輪聖王として此の大理想を實現し給ふべき至尊に涉らせらるゝことを主張したのであつた。即ち王法と佛法との融合を力説して北條財閥に對し大反省を與へ粗雜なる指導階級に對する大折伏を爲したのは眞に現代頂門の金針と言はなければならぬとであらねばならない。一八、七、八一

價值・存在及淨土

村田迪雄

普通文化と自然とは相對立する二概念として用ひられる。

文化とは何か。

文化とは(若し價值に關する西南獨逸學派の立場が許されるならば)超越的價值、ラスクの所謂價值自體の經驗的實現の總體のことであると解される。かゝる價値の實現者は人間である。即ちそれは人間の有意的勞作によつて實現される。だがこゝに注意すべきは人間の意味である。こゝにいふ「人間」とは、社會關係を離れた抽象的人間を意味するのでは

二には日本、臺灣、滿蒙を以て一九とせる統制經濟の確立、國家社會主義の實現と言つてゐるが、此の問題に就いては相當の選練せられたる考へ方を持つことが必要である。國家社會主義と言へば如何にも日本的であるかの如く聞えるが實は社會主義を國家なる一單元の中に於て爲さんとするものであつて、國家なる假面を去らしむれば下地は社會主義であり共產主義を緩漫に實現せんとする思潮のそれであるかも知れない。それは斷じて我國の執るべき處でない。それから支那社稷の思想を以て地方分權を主張し、農本自治を主張すと雖も、日本國體の尊嚴に觸れざる精神のものは採るべからざることこれである亦日本主義を主張すとも固陋、皮相の見解に立つて建設を豫想せざる破壊を爲す類は又慎まざるべからざるものである。

故に眞の吾人の向ふべき處は神儒佛三教即ち日本文化の淵底を探り、而して今日に到るまでの先人の

ない。それは恒に、たゞ社會關係に於てのみ考へ得る社會的存在としての「人間」を意味する。

價值を現實に實現するものは勿論各個人を離れては存しないが、しかもそれは個人が社會を離れてたゞ彼自らの欲求によつてなすものでない。

個人は夫々社會の中に屬し、その社會に共通な夫々の社會意識の中に於て生活する。

價值はかゝる社會意識の中に於て求められる。

社會意識はデュルケムのいふが如き個人意識を離れた客觀的存在では勿論ないが、今便宜これを個人意識と區別し、前者を社會、後者を個人なる語によつて代用せしむるならば、價值の要求の背後には個人を動かす社會的存在が考へられる、價值はかゝる社會によつて求められるのである。

即ち社會は夫々の發展段階に於て、それに相應しき價值を要求し、又その實現を可能ならしめる。

社會成員としての個人は、いはゞその現實的な實現への勞作者であるに過ぎない。

こゝに價值は單なる主觀的妥當性以外に、社會的な普遍妥當性を、又その發展段階に於ける必然性を化發展する。即ちより部分的なる價值より、より全體なる價值へ、より低次なる價值より、より高次なる價值へと——。かくして超越的價值は、それが現實界に於て實現される場合には常に相對的のみに存し、その實現は決してその全面に於てなされるものでない。たゞ經驗的價值はかゝる無限なる發展の過程に於て、超越的價值へと限りなく近づくのである。

私達はそこで、その終極即ち極限に於て、超越的價值が、その全面に於て完全に實現せられたる一つの世界を考へることが出来る。

この世界を現實界に對して淨土と呼ぶ。淨土とは即ち存在と價值の一致せる世界である。換言すれば存在と價值の間の一切の溝渠が消滅し、あらゆる存在が價值化せられたる世界をいふ。

かうした世界は人間社會の目指す理想終であらうそれは私達にとつてはさだ遙かに遠い彼岸にある。かうした世界は私達には遂に與へられないものであるかもしれない。でも人間はそれを求めてその永劫な精進の旅を續けてゆくであらう。

獲得する。

自然とは何か。

普通にはこれを人間の有意的勞作の加はらざるものと解する。

これは何を意味するのか。こゝではそれを價值化されざる存在であると解する。

文化と自然とは相對立するが、しかもそれは互にその外延を異らしめる離接概念ではない。それらは互に「存在」を豫定し、存在の領域に於てその外延を同一ならしめる。

自然とは即ちあるがまゝなる存在のことであり、文化とは即ち價值化されたる存在のことであるに過ぎない。

價值は妥當者として必ずその根柢に存在を豫想しなければならぬが、しかし現實界に於けるすべての存在は必ずしも價值化されてゐるとは限らない。こゝに現實界とは存在と價值の分裂せる世界であると解される。そしてそこに實現せられたる價值は必ずしも絶對的なものではない。それはその實現者たる社會そのものゝ進化發展を反映し、それ自身も亦選

淨土は飽迄もこの現實界に於て實現されるべきものである。淨土は何らかの空間的なる、或は時間的なる、即ち墓場の彼方なる彼岸に於て求めらるべきでない。何故なら私達は、私達に與へられたこの存在以外に價值實現の場を持たないから。

(八・七・一一)

杉森氏の倫理學を讀む

在アラジル 武 田 三 三

早稲田大學教授杉森孝三郎氏の「今日及び明日の生活の理想的原則としての倫理學」を讀みて數年來少からず疑惑を抱懐し來つた次第であるが、爾來六年自己の經驗と社會の變遷とに鑑み茲に教を諸先覺に乞ふ次第である。

氏の倫理學は表記せられたる通り理想的原則として冷靜に述べられたる科學であるから、吾等も亦冷靜に之を讀んだ譯で、職業的自己辯護的に感情を以て爭論すべきもので無いと同時に、氏が徹底的に否

定排斥し了したる既成宗教信者が如何なる科學的根據を以て氏の倫理學に對抗せんとするか、苟も大學教授として倫理を説き幾萬子弟を直接に、幾萬讀者を間接に既製宗教より解放せんとする努力に對し之を默認するが如きは信仰の許す所ではあるまいと思ふ。

氏の倫理學は五段に分たれ第一段政治倫理に於て忠君愛國は社會價值に於て絶對に非ること則價值低級なること、第二段經濟倫理に於て勞働價值を認むべきこと、第三段性倫理に於て女性の人格を認むべきこと、第四段教育倫理に於て現代教育の改善、第五段信仰倫理に於て既成宗教の徹底的排斥を説かれて居る。而して此中に疑惑を生ずるものは政治倫理と、信仰倫理である。既に氏の倫理學は國家を超越したる人類倫理であると觀れば必しも今論争の必要無き事柄ではあるが、今日の生活を處理するに窮しつゝ明日の理想を説くの効果に就ては大に疑問が有ると思ふが、これも冷靜なる科學であると見ればそれ迄であらう。最後の信仰倫理に於ける既製宗教全廢説が根本疑惑である。

説いて居るが、斯の如き倫理學は明に自家撞着の論法であつて、聞く者をして何等の信仰をも生ぜしめず岐路に彷徨せしむるものと思ふ、これ疑惑の四である。

全人類の社會奉仕は來生に待たねばならぬ、理想も亦然り、而して氏は來生を以て有りもせぬ迷信なりと説く、これ疑惑の五である。

來るべき人類の社會奉仕を望まば、君と親とに奉仕するを以て至當の順序とする、不完全と知りつゝ、親を思ふの情は則國を思ひ社會を思ふの情である、量の價值を以て性を否定するは間違である、氏の政治倫理は此點に於て成立せぬものと思ふ、これ疑惑の六である。

果報の信仰無くして勞資問題は片附かぬ、勞働價值は幾ら論じて見ても資本家が支拂はぬ、争闘の結果厭や／＼支拂はれたる金銭は勞働者は快く受取らぬであらう、氏は現代消費者の認識と評價が幼稚であり無智であると共に薄情であると説かれて居るのは大に同感であると同時に、既に薄情を歎するの心は冷靜なる科學者の域を脱して慈悲救済の宗教を求

氏の宗教觀によれば「理想」を以て神と爲し、此目的たる神に達するが爲に「手段神」を必要とするがあるが、此説明は全く佛教と同一なるものと認める而して氏は佛教を以て既製宗教中最劣等のものとなし、教祖主義、經典主義を排斥し、有りもせぬ來生他界、靈魂不滅乃至方便を説くを以て認識不足の至す所の淺薄極まる人生觀であると説かれて居るが、既に吾等は氏の理想宗教が佛教と同一なるものと認むるに對し、氏は全く反對と認めらるゝ點が疑惑の一である。

理想と言へば合理的科學的であり、佛法と言へば不合理非科學的であるか、これ疑惑の二である。理想を説けば科學者となり、佛法を説けば教祖となる。哲學、心理學は科學者の經典であり、佛經は教祖の經典である。而して佛法は哲學も心理學も認めて居るが、獨倫理學が之を認めぬのであらうか、これ疑惑の三である。

氏の信仰觀は既製宗教乃至制度の全否定則革命誘導法である、而して氏は結言に於ては手段としての革命を避け、結果としての革命則理想に待つべきをひる心であらねばならぬ。而して佛教は最劣等なる宗教なりと斷定し去るは究めざるの致す所であつて氏の經濟倫理は此點に於て成立せぬものと思ふ、これ疑惑の七である。

理想を以て神と爲し、手段神を以て階梯と爲し、幸福を以て神の象徴と爲し、良心を以て手段神の象徴と爲すと説かれて居るが、これでは宗教に爲らぬと思ふ。則ち氏が可能と説かるゝ理想宗教は却て不可能事其物であると共に、佛と十方の諸佛とは明に理想と手段とを具體化したる堂々たる宗教であると思ふ、これ疑惑の八である。

出版と、學校と、教會とを以て真正宗教の社會的組織とし、絶對無教祖、無經典を以て運用すと説かれてあるが、これ亦空論であると思ふ。假に學校と教會とを道場と觀れば、出版物は經典であつて既成宗教と大差なきのみならず、既成宗教の改善とは受取れぬ、且又親を尋ねて三千里の情念を喚發すべき至上の人格が缺けて居つては宗教に爲らぬと思ふ。これ疑惑の九である。

内船から重須へ

敏 二一 郎

○◇○
 身延驛から電車に乗つて南へ約十五分、車は富士川べりの内船南部驛につく。驛から更に又こんどは徒歩で約十五分、川とは反対の方角へ向つて路を築に登つて行くと、山腹の小高い場所に、四條金吾夫妻が晩年隠棲の地たる内船寺を見出すのである。

さしたる年輪もなき相な杉と檜との間にはさまれた勾配の緩いしかし三百二十の石段——場所が小高いだけに境内からの眺望が非常によい。前方右手に笹井山、左手に貫ヶ岳、其他さだかには名もない多くの山々が青空に美しく曲線を描き、下には廣い河原に富士川がサラ／＼流れてゐる。今、住持の留守を預る寺男にきいたら、身延の御山へは三四里でせうと答へてくれた。金吾は、山中の聖祖を定めし幾度となく御訪ねしたことであらう。御神庵へとこゝろさす白馬鞍上の人影が、川向ふの連山の下、青葉がぐれに遙かに小さくテラ／＼と思ひ浮べられてならなかつた。寺は、洵に形勝の地を占めてゐるのである。

内船寺は、軽い傾斜で南(?)下りに走る山脚の途中の地を開きながら建てられてゐるので、境内はせましく又形は長方形である。鐘樓と新築の山門とが前列をなして横に並び、本堂と庫裡とが後列となつて矢張り横並びになつてゐる。別な言葉で云へば、鐘樓と本堂、山門と庫裡、この二つの組合せが縦列になつて左右に並んでゐるとも申せる。何のことはない、上記四つの建物が、四角形の四隅に一ツづゝ立つてゐると思へば話が早い。これは境内がせまくて奥行の乏しいせいかもしれないが、本堂と庫裡とがうしろに横に並んでゐるのは少しも不思議はないとして、鐘樓と山門とのこの配置はどらも面白くない感じがする。臨に倉の如き建物が二つあつたが、茲に態々書く程のものでもない様である。
 本堂に上る……古い……外観ではそれ程とも思はなかつたが内部に足を入れたら、一見、古い疊が氣味悪くブカつく。思ひなしか柱が若干傾いてゐる様にも見える。建具の建附が皆少しづゝ狂つてゐる。小僧さんが——美しく舞袖と云ふには年を喰つてゐる。改まつて所化と云ふには一寸ばかり若

い。ふさはしく沙彌と云ふには何だか俗ッぽい。無遠慮の云ひ方だが、矢張り小僧さんが——一つのお厨子を開けてくれたら、今日まで寫眞ではそれこそ度々見、非常に親しく思つてゐた四條金吾夫妻の木像が、今、マジ／＼と眼の前に現れて来た。

像は、入道姿で跏坐してゐる。鎌倉の光則寺本堂の臨佛壇にある在俗姿の金吾像に思ひ合せれば、その面ざしには漸く重ねた年齢と、圓熟期に到達した心境とが、味ひ深く刻み現はされてゐるのである。身體全體のこなしでも、在俗姿の壯なりと雖も生硬味のとれてゐないのに比して、これは老練に伴ふ當然のこなれを窺ひ得る。

(老練など、云ふと如何にも語感がよくない。だが、年よりて志念堅しとの本来の語義通り用ふるなら、何も差しつかへはないと考るので、茲に註をばさんでこの語を使ふことにした)

此の像で一番よく氣付かれるは、新月の様なすゞやかな眼である。武士あがりの上に、氣魄を尊ぶ本化門下の人のそれとしては、或はそぐ／＼はないでもないが、何にせよ、芳潤味の満々とした眼元である。又、兩像を合せ見て、金吾の前額部が相當廣かつたらしいことが想像し得るのである。

本堂に、前記新築山門の淨財喜捨人の名前が張り出されてゐるが、これを見て四條姓を名の者が非常に多いのに一驚を喫した。小僧さんにきくと、三四十戸は間違なくあります

と云ふ。申すまでもなく、皆、四條氏の後裔で、この土地に在住してゐるのである。後に書く上野の南條氏の後裔が、その土地から全く姿を没してゐるのと、よい対照である。

本堂のうしろへ登ると、丁度堂のまうしろに當る所に四條夫妻の墓がある。本堂の内部に正座して讀經廻向すれば、御本尊に對する位置がそのまま本堂うしろ上の夫妻の墓域に正しく相對することになつて、それは直ちに夫妻への讀經廻向ともなる具合である。朽ちふりた木欄の中の小屋に、恰好は若干違ふが共に五輪の墓石が二ツまつられてゐるのである。その小屋の外部の左右には、右方に「開山教支院日頼上人」左方に「開山殊勝院日眼上人」と刻まれた石が置いてある。小屋の内の右の五輪が金吾の、左の五輪が夫人の墓石と云ふこととなる。他からは區切られたこの木欄内に、大きな二本の櫻がある——櫻も櫻、枝垂櫻が二本ある。金吾夫妻は、櫻と共にねむつてゐるのである。

庫裡の幅の廣い椽先には、器粟や葵や睡蓮などが仕末よく丹精されてゐる。寺男がするののか、さつきの小僧さんが好きなのか、又は住持の手さびなのか、眺望はいくらよくても、こんな人氣のない淋しい所にゐたのでは、せめて草花が友ともならう。長い石段を下り始めたら、いつか知らぬ間に姿を消した小僧さんが、下へ何か買物に行つて来たと思へ、帽子もかわらず着流しのまゝで臨に小さな風呂敷包みを無造作

にかゝえて、石段を右端へ行つたり左端へ寄つたりしながら
笑顔で上つて来た。如何にも屈託がなさそうである。

○ ○ ○
富士北山の本門寺は、大宮驛からバスで二十分位の所にあ
る。開山日興上人から勸氣を蒙つた日尊上人が、寺を出て西
に東に巡教して歩いたが、十月の大會式の折には毎年の如く
巡教先からわざ／＼寺に來詣しつゝも、御勸氣の身の上とて
上堂も叶はず、堂前の石に腰かけては讀經唱題すること實に
十二年にも及んだと云ふ話で、餘りにも名の知れた本門寺な
のである。先づ寺で出してゐる刷物の中から、寺の縁起に就
いての箇所を抜き書してみる。

(各その場所の寺で出す案内書なり、境内に立て出した揭示なり
には、兎角にヨタが多い。だが、それ等に大過なき限り、遠くか
ら杖をひく者には一番ゆかしい、そして後になつては思ひ出深い
ものである。)

開山日興上人は、聖祖御在世の頃より多く富士にありて、上
野、松野、西山、高橋、河合、小泉、石川等の豪族を教化
し、聖祖御入滅の後は暫く身延山にあり常在院と稱する子
院を建て之に住して御墓所を守護し専心孝道を盡せしが
(常在院とは、今、身延にある西谷の林蔭坊のこと——筆者)
正應元年十月、聖祖第七回忌辰の法會を終りて後、厚く信
じ深く感ずる所あり、其年十二月五日、聖祖より付屬の本

まゝ進んで二天門の前に立つて參道を見返れば、道の左右に
長く／＼並ぶ杉並木の美觀に打たれて了ふ。杉と云へば、こ
の本門寺全體が一ツの杉木立の中にあるのであつて、大宮驛
からバスで来る途中人の好きそうな運轉手は、一むらの杉林
を遙か遠くに指してあれが本門寺の杜だと教へてくれた。廣
々とひらけた富士山麓の廣野に見出す杉木立である。梅雨雲
が低くたれこめて富士の山を出し惜んでゐるのは如何にも殘
念だが、實はこれだけでも已に立派な書題なのである。この
寺への第一感からが非常によい。新築の本堂の向つて右側前
に、前記、日尊上人が會式に遙る／＼來つては腰をおろした
と傳ふ。所謂日尊上人御腰掛石がある。又、本堂後方には、日
興上人御茶毘所のとがあつて、石でたゞ一段高い所に
碑がたてゝある。鳥渡裏へ廻れば、靜な木立につゞまれた一
劃の墓域があつて、その衝き當りの古大木の根がたに日興上
人の接神の奥津城があるのである。あたりには雪の下が一杯
に白い花をつけてゐた。この墓域の墓は五輪が多く、又それ
が割合に行儀よく縦に並んでゐて、この時私の心には何か知
らぬが石に靈あつて憂ひに沈む黙々たる姿に寫つたので、一
入氣のしまるのを覚え、人なき閑寂な淨域に幾百年ものあり
し昔を十二分に偲ぶことを得たのである。

上人の墓は、スナナリとした寶篋印塔である。疑のないサ
ツバリした基礎の上にやゝ長い塔身がのり、その上の笠は又

尊、聖教、及び生御影尊像等を奉持して身延山を辭じ、駿
河河合にて越年し、南條氏の請を允して翌年上野に移り、富
士一帯の信徒を教化すること四ヶ年なりしが、正應四年、重
須郷の領主石川孫三郎源能忠の邸に至りて教化を施し、丸
山の風光を賞しその規模の雄大なること天下に冠たるを感
じ、祖命に依り余が多年一日の如く希望したる本門戒壇建
立理想の靈地今こゝに得たりとて之の意を石川能忠に通ず
能忠亦た夙に之の理想を聞きしものなれば、己が邸宅の之
の大理想に適せる光榮を喜び、直に自ら中村の地に退きて
その邸宅を擧げて之を寄進せり。茲に於て先づ方丈を建築
し、正應四年九月を以て茲に移り示來六ヶ年、石川、南條
小泉等の信徒の合力に依りて永仁六年戊戌に至り本堂の建
立成り、二月十五日を以てその開堂の式典を擧げ、稱して
富士山本門寺と云ふ。

バスが寺の横手へついたらめ、先づ眼に入つたのは日興上人
御手植と稱する七本杉である、随分大きなものだ。立札にか
う書いてある。

七本杉。開山日興上人永仁六年春三堂建立ノ初、御手植セ
ラレシモノニシテ、一名題目杉ト稱ス。明治十八年雷雨ニ
依リ一本折損。昭和七年十一月十四日暴風ニ依リ一本折損
ス。目通二丈五尺ヨリ一丈九尺。

成程、右の内二本は無残に折れたあとをとめてゐる。その

軽い感じのするもので、一更に重懸の風がない。たゞ相輪が
若干頑固で、清婉な下部とつり合はぬでもないが、兎に角全
體としてスナナリしてゐる。毅魄豪健の上人を思ひ偲ぶには
鳥渡縁遠い様である。墓は墓であつて、その人を端的に語る
書でもなければ書でもない。墓に對してかゝる言葉は全く出
す可きではないのだからが、扱造り方一ツで表現性に富む寶
篋印塔である。そんな事は萬々承知の上でも、遂その形を以
つて地下の人を偲ばうとする。私は、上人の墓としては別塔
が一番ふさはしくはないかと、思はれてならないのである。

本門寺の裏二三丁の所に、日頂上人の葬られてゐる正林寺
がある。田圃の中の一段高い木立がそれであつて、十ばかり
石段を數へて上ると、正面に小さい然も粗末に荒れた本堂が
ある。

本堂の右方にある五輪塔が、日頂上人の墓である。地輪に
當る石の腰の浮いてゐると、上部の風輪と空輪との間に溝
があつて長いのと、餘り恰好のよい墓ではない。五輪塔とし
て形の優れてゐるものは(宗門關係内では)何と云つても、鎌
倉極樂寺のうしろにある良觀和尚のそれであらう。高さ十五
尺、石面一字の文字もない。一見の價値は充分ある、鑑賞的
にも、亦宗門的にも。但し、石造美術の専門眼からは果して
どんなものか知らないが、兎に角凡俗のみた眼には洵に形の

よく整うた良觀和尚の五輪墓ではある。環境も、墓域としては、これよりも和尚の方が遙かにまさつてゐるのである。尚上人の墓側には、日妙尼や乙御前の墓と稱されるものがまつられてゐる。そばに碑が建てゝあるが、長の風餐雨慮に碑面の文字は全部は読み兼ねた上に、相憎ボツ／＼きだしたので空しく去ることにした。六牙湖師の「別頭統紀」頂尊者の下には左の如く書いてある。

(碑文と意に於て同一か否かは、右の次第で保しがたい。)

正安元年己亥三月二十日、富木入道日常上人逝去。師、悲哀に堪へず、水漿口に入らず、殆んど性を毀に至る。父の禮を以て喪を闋る。乾元元年壬寅三月八日、法を日揚に付して弘通行脚す。往て駿州富士郡重須村に到り、父の舊趾を思ふて停住して父母の塚を弔し、之を離るゝこと能はず、前後之に處すこと十六年。文保元年丁巳三月八日、微恙を示し泊然として化す。時に六十六。中略。時に日興尊者、大石寺に在つて審問苟もせず、遂に骸を山の麓に空し、常林寺(初め小林寺と呼ぶ)を造て師を開祖となす。今、重須本門寺に録すと。

同書に依れば、日頂上人は重須の邑主橋樹氏伊豫守定時とその妻日妙との間の子で、定時の死後母日妙が富木氏の後妻となつたと云ふのである。又上人の弟妹にば、寂日房日證と乙御前があつたと云はれる。但しこれが正確な歴史的事實であ

るのか。又は單なる傳説であるのかは、再考の餘地が充分にある様に思はれるのである。

あたりよりは一段小高い境内から廣々とした周囲がみえる石段のそばの木に、馬が一頭繋いである、直ぐ下の畑で一家を擧げて働いてゐるらしい人達の今迄使つてゐた馬なのであらう。畑の人に親しく赤襟々な話を聞いたら、どんなにがい生活苦を語り出すか知れたものではないが、たゞ無心にみ入る此のあたりには、仲び／＼とした豊な田圃の詩情が注溢してゐる。ボツ／＼來た雨は止んだが、雲は依然として低くたれて、富士は不相變姿をみせない。

霧時雨不二を見ぬ日ぞおもしろき

芭蕉

こんな句が思ひ出されたけれど、私には句に見る様な風雅な氣持は相憎とない。矢張り山の全貌が何でも見たいものだと、不風流な野望が頭を上げてならなかつた。

○ ◆ ○

大石寺は、波木井氏と意合はずして祖山を去つた日興上人が、南條氏に寄つて創めたものである。前記本門寺よりは、時に就いて少々先に出來たのであつた。正林寺から歩いて行くと、これも廣野の中の一むらの杉木立の中にあるのである。たゞ、本門寺と云ひ、正林寺と云ひ、杉は皆若いがこののはどれも直々とした老杉のみである。安定性を缺いた大きな山門の所に佇んで、奥深く本堂の方へ眼をやると――

中央に一直線に帯をひく敷石

綺麗な水の走る粗野に趣のある左右の溝

ズツト奥へと続く背の低い古風な左右均整のとれた石垣

石垣のト切れ／＼から顔を覗かせる坊々への石段

軽い反の付いた坊々への石の小橋

坊々の入口に立つどれも古色を帯びた石燈籠

燈籠の火袋に新しく張られた四角な白い紙

奥のつき當りに背景となるコンモリとした老杉の社

石垣の處々に咲く赤いつゝじの花

石垣の上から徑にフウワリとたわむに垂れる多くの枝

垂櫻

横道から出て來ては本堂へ向ふ僧達の白衣ものゝ配置と云ひ、色の對照と云ひ、環境のしづけさと云ひ感觸の味ひと云ひ、この秋景は蓋し言葉や文字のよくする處では全くない。良寛は書で繪をかけたし、ヘルンは文章で畫をかけたものだ。毛筆を持つても、ペンを握つても、所詮繪

をする外、この秋景に對しては事實何とも云ひ様がないのである。淡い夢の世界に逍遙する氣分とでも云はうか。奈良や京都の寺々を巡つても、こんな夢幻的情緒の深ふ所は、先づあるまいと思はれる。人氣はなし、空はドンヨリと濃んでゐ

る。所謂心音に聴き入らしむるていのさびや侘びには尙缺くる處ありとするも、こんな所につき出される梵鐘の音にこそ淨樂我常の響はきゝ得るでもあらう。かゝる景觀を己れの心から外部へ再表現するには、いかに數千萬言を自在に使ひこなしても、散文では到底駄目である。言愈多くして文は益冗漫に流れて了ふ。さればとて、短かきにすぎずは、意は全く以つて表はし得ない。矢張り三十一字か十七字の端的な方法しかあるまい。漢詩、勿論悪くない。併しそれは日本人の誰でもが作り味ふと云ふわけにはまらぬ。漫然と思ふ時、人は漢詩を以つて和歌よりも俳諧よりも遙かに優れたものだと考へる。が、それは大きな間違ひなのである。三十一字に、乃至は十七字に、この短詩型の内に漢詩の持つ以上の内容と表現とをもち込み得る處に、深みがあり尊さがあるのである。私はこゝの情緒に酔ふの餘り、己れに歌心のないのをシミジミ口惜しく思ふと共に、端的尊高な和歌や俳諧を、自らはよく作り得ずとも、せめてこれを味ひ得る一日本人に生れついたことを幸ひに思ふのであつた。

御影堂の裏に熱原法難の三人塔がある。神四郎の居館址と傳へられる熱原の本照寺に神四郎の墳墓はあるので、これは供養塔なのであらう。こんな立杭がある。

宗祖大聖人の頃日興上人を始め日秀日辨等、弘安年中岳南の地に弘教せられ偶々一大法難惹起するや、富士郡下方の

庄熱原の住人神四郎彌五郎を始め二十餘人深く法華經を信じ、遂に鎌倉に於て刎首の慘刑に處せられ殉死す、之れ即ち右法華代表三烈士の墓碑として傳ふるなり。

石碑の前には、小さい五輪が三ツ並んでゐる。當時の顛末を思ひ遣らせば、神四郎等の命を賭しての純信に唯々尊敬私淑の頭を頂垂れざるを得ないのである。

境内には多くの觀る可きものがある様である。が、思ふ處あつてこのまゝ引き返すことにした。山門から奥を眺めたことよない情緒に浸り廻り立ち止はしたものの、私は味ひ損んだこの豊かな氣分を何物かに依つてムザムザと毀されるのをいたく恐れたのである。空しく頷かれようよりは、それ以前に引き返すに如くはない筈である。御影堂の裏へ廻つても、實は心の裡ではこゝろであつた。但しそれはどうせ印象であり感じである。次にこゝへ来た時、果して今と同じそれを感じ出来るや否やは、寔に怪しいものだ。でも、せめて受け得る今だけなりと、大事に少しでも長く懐き止めたい。境内は次の機會に廻るとしよう。かくて折角立てた足を三人塔だけで直ぐ元へと引き返し、再び山門の下に御腰をすゑて又夢幻の境に彷徨し、暫くは時のすぎるのも覺えなかつたのである。

本門寺や大石寺と共に、矢張り富士五山の一ツである妙蓮寺は、南條氏の邸址に寂日房日華が建立したものと云ふ。

★★★ 記事 ★★★

本部 團報

孟蘭盆會精靈祭 釋尊御在世に於て、目連尊者の孝順に稱を發して以來、我國では第三十七代齊明帝の御代に、七月十五日孟蘭盆供を行はしめたまひより、この祖先崇敬、追思孝養の徳風が盛んなり、遂に津々浦々に至る迄年中行事中髓一とされて來た。特に近來一方には唯物無靈魂説を高調せるにも拘らず、彌々回向供養の宗教情懷が炎々として國民の上に發揚されて多かつた事は法國の爲めに慶ばしい次第である。夫れには 恩師日生上人の御化導亦大に與かつて力あること申す迄もない。

先年品川妙國寺に於てこの孟蘭盆水向供養の行はれた際に、日生上人は「今に小學生徒もお盆には一日學校を休ませて先祖のお墓参りを致し、説教を聞くやうにせしめた」と語られた事を憶念して、淺草時代には禁まれなかつたけれ共、本年はこの新會館に於て、恩師の御命日七月十六日午後一時半から精靈祭を、恩師と最も親しい即ち兄弟弟子の鈴木權大僧正を導師として、最初に 聖應院日生上人の慈恩御回向を營み、引繼いで團員各家先靈累代乃至新舊諸精靈の爲めに懇ろに讀

（五山は以上の三ヶ寺に西山の本門寺と富士根村の久遠寺が加はる）狭い境内に、本堂とそれから至つて古風なガツツリとした庫裡とが並んでゐる。今にも降り出しさうな小暗くさへなり始めた夕方、若干疲れた足を引き摺つて行つたせいなのかも知れないが、南條氏の邸址として見る此の寺のさびれ方には、そゞろに一抹の哀愁を感じざるを得なかつた。それに、留守居の人に教へられ門前の二支坊に這入つて聞けば、南條氏の子孫はどうしたものか現在では全くあとかたもないと云ふ、時の移る處、蓋しこれも亦やむを得ないことなのかも知れないが、その昔一族の人々に聖祖から五十篇にも餘る多くの御書を給つたことどもを偲んで、凡情の催すまゝに淋しさの霏々と襲ひ來るのを、どうおさへようもなかつた。

正面に安定性を持つて建つ草葺單層の山門がよい。美事な組物、如何にも昔風の左右の出窓、俗眼には共に見るべきであらう。大工は齋藤定右衛門、文政二年三月に出來たものとか。けれども、箱棟に「多寶富士山」扁の下の横木に「妙蓮精舎」と出てゐるのは、丁度骨董品に正札を付けて尊さをアタラ冒演したのと全く同巧異曲である。南條氏の内御書に出て來る人々の墓は、相當の距離を置いて三ヶ所にあるとのことである。遺僧、時間がなかつたのでそのどれも見られなかつたのが遺憾である。

大宮行のバスに乗る可く往還に出る途中、「上野尋常高等小學校」上野村役場「上野村遺在部長派出所」等の名を見出した。上野村——上野村——あたりの平安な野情をまつまでもなく、日頃御書を鑽仰する身には、今更らに形容も出來ぬ親しさである。

経題題した。其戒名數は實に二百四十餘の多きに達し、從つて相當の時間を要したけれ共、其趣しき午後三時頃の最も堪へ難い間であつたが焦熱苦を思へば何でもないとばかりに護殿に満堂の大家、中には座席もなくて行立合掌唱題されつゝあつた貴い方々も十名以上あつたが、一同至誠をこめて、曩に御供養申上げた要品を手にしつゝ丹念に法要が營まれた。「地徳院殿妙修日溫清大徳」と川原女史の戒名が讀み上げられた時は、心ある人々に一種の感を深めしめられた。「持法院日昌信士」と中山昌治氏が法鼓に響つてからは眞實な操る毎に、ア、中山さんが居られたら……と思はぬ時はない、其他父母妻子六親九屬の戒名を聞いては、必ず一種の靈感を覺える、即ち不滅の魂に觸れ合つて感應道交するであらう。神明の加護とは一面に於て其等の護靈の冥用ではあるまいか。一朝事變のある時に、我國には必ず天祐ありとするは實にこの護國の諸精靈が加被せらるゝものなりと斷じた。これを憶ふにつけても私共は機會毎に佛事回向の大切なるを痛感致す次第である日蓮聖人の仰せに「古人の語にも一死一生交情を知るに云へり、げにも生たる時の情は五の事なれに還て我が爲なり、只なき時のおもひにそ實の志なれ。然るに生たる時は親しみ昵びて死にはつれば思ひも出さず、まして引ふ事なからんは更に人倫と云ふ様之れ無し橋へて橋へて亡魂の苦提を引ひ給ふべし」と

又た「舊家の孝養は今世に可きる、未來の父母を扶けざれば外家の孝養は有名無實なり、外道は過去を知らずとも父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶くれば孝養の名はあるべけれ、しかれども法華經巴韻等の大小乘の經宗は自身の得道猶かなひがたし、何に況や父母をや、但文のみあて義なし、今法華經の時こそ女人成佛の時、慈母の成佛も願はれ達多の惡人成佛の時、慈父の成佛も願はれ此の經は内經の孝經なり」と實に有り難い大第である。而してこの法華經王が目下 本講堂に於て毎週木曜日小林一郎先生に依つて平易に講明されつゝあることは、いかにも意義の深い事と思ふ、日本國の人々がこの法華經の題目南無妙法蓮華經と一緒に唱ふるやうになつた時こそ所謂「吹く風枝をならさず、雨を降かす」で、現世安穩後生善處であらう防空も經濟も、この根本道念の安住なければいよいよの時には全く懸念に堪へない感じがある。

然りと雖も吾等は作すべき事を致さずして徒らに天祐を期待するものではない、宜しく「善根を修して其得脱を祈る」とことである。「凡そ一樹の陰に宿り一河の流をくむ事だに多生の縁とこそ云ひゆるに、まして況や親となり子となるをや——其上多くは子を思ふ故に地獄の重苦を受ける事あり、引ふべきは二親の後生善提である」と所詮亡者の浮沈は追善

の有無に依る理を思へば、お互に信心を勵ま
して自他の回向を致すべく、更に最後に日支
事變犠牲者諸精靈に法界萬靈の爲めに苦惱
を祈つて、爰に百數十の大衆は悲しく三時半
に法要を終了し、小憩の後、左記の通り講話
に移つた。

同會の辭 常任理事 磯部 滿壽氏
理事長 上田 辰卯氏
執行 藤 教務部 梶木 顯正師
孟蘭盆に就て 山口 智光師
閉會に際して 文學士 河合 勝明氏
當日の法筵に於て、そこに幽明兩界の多数
の方々は充分に、法味を掬されたであらう。
同五時半 小雨の降つたり止んだりする中
をば、お互に感面しあつて名残を惜しみつゝ、
各家路に辿られた、南無妙法蓮華經。

法華經講座 暑い折柄にも拘らず求道熱に
爰ゆる多くの士女が、極めて敬虔なる態度で
毎木曜日の晚に、小林先生の妙釋に隨喜來聽
されて毎會新入者を見るは、法國の爲め常に
心強い感がある。
因に七月廿七日を以て第一期の終講とし、
八月は暑中休と致します。
日曜講演 六月第四日曜より七月第二日曜
日に到る本講演は左の通り開催された。
一、日蓮主義信仰 梶木顯正師
一、日蓮主義の時代の活用 田中道賢氏
一、價値創造の力としての佛敎和實義見師

一、法華行者の迫害と歡喜心高田直三郎氏
一、藥王品の眞精神 小西日喜師
追前七月廿三日より暑中日曜講演は屋外に
運出することに決せられた。即ち午後七時
本館にて修法を誓ひ、八時江戸川公園前に
於て天氣の許す限り街頭獅子吼する、有志
は奮つて御來接して歡きたい。

横濱教誌

六月四日 夜 神奈川篠原町の佐藤氏方に
て集會。
同九日 夜 磯子の高橋氏方にて集會小西
日喜師御講話。
同十一日 夜 鶴屋町京田氏方にて集會、
毎月十二日に集るのだが、都合で一日繰上げ
同十四日 夜 中區千歳町高田氏方集會。
同十五日 夜 高島町石毛氏方にて、夜二
本館町の金子氏方にて集る。小西師御來講。
同十八日 晝 生麥貝塚氏方にて集會。和
賀義見師御來講。夜の岩上氏方での集りは都
合で今月に限り休會となつた。
同二十四日 夜 磯子北山氏方にて集會。
同二十七日 夜 小西師の御講話で三ツ澤
斎藤氏方にて集會。
當地の教線は決して花々しいとは云へない
かも知れない、がデモ著實に一人の退轉者も
なく、毎月必ず十回前後の集りを營んでは確
固たる歩みを十年一日の如く歩んでゐる。即
ち量よりも質を第一とせる方針なのである。

二本松教信

六月四日夜 於華華寺題目講修行。
同十四日午後六時〇八分二本松驛通過にて
山形縣隊大橋少尉以下十六名の眞傷兵隊に
歸る因つて見送す。
同十五日貧困者救濟二本松佛敎不榮會托鉢
修行。
同二十二日午後四時三十分二本松着にて多
門師團長來松す因つて歓迎す。
同二十三日午前六時五十九分二本松驛發に
て多門師團長歸松す因つて見送す。
同二十四日午後一時五十七分二本松驛通過
にて山形縣隊戦死者遺骨五十九基原隊に向ふ
因つて見送談經す。
同二十五日午前六時四十分二本松驛通過に
て鹽田中尉の遺骨郷里に歸る因つて見送談經
す。
同二十六日午後三時十六分二本松驛通過に
て歩兵伍長主濱重太郎の遺骨郷里に向ふ因つ
て見送談經す。

北滿教報

六月二十五日夜七時 於滿鐵社員俱樂部
一、行動の宗教 布教主任 笈 義章師
一、日蓮主義と王道樂土 楠賢都 同松範丈師

新加盟者

東京市大森區入新井二ノ一一八八
市川第十郎殿

同 麴町區有樂町二ノ九
増子 酉 治殿

静岡縣賀茂郡稻樟村
千葉 機 外殿

東京市澁谷區常盤松町
高橋 福一 郎殿

横濱市神奈川區篠原町一〇八八
鈴木 二 光殿
(石毛はる氏御紹介)

寄附維持金圓費誌料領收

(自六月二十一日至七月二十日)

金貳圓貳拾錢也	東京 大原 行道殿
金貳圓貳拾錢也	岡山 品清殿
金貳圓貳拾錢也	布哇 小林 日種殿
金貳圓貳拾錢也	東京 渡邊 廣明殿
金貳圓貳拾錢也	千葉 伊東梅四郎殿
金貳圓貳拾錢也	東京 吉川 あか殿
金貳圓貳拾錢也	津山 玉置 留男殿
金貳圓貳拾錢也	東京 小峰 豊子殿
金貳圓貳拾錢也	名古屋 牛田 共保殿
金貳圓貳拾錢也	名古屋 市川第十郎殿
金貳圓貳拾錢也	同 柴田 武治殿
金貳圓貳拾錢也	同 前
金壹圓貳拾錢也	久留米 平岡 越郎殿
金壹圓貳拾錢也	東京 土肥 茂男殿
金壹圓貳拾錢也	同 猪又金太郎殿
金壹圓貳拾錢也	同 馬田 平藏殿
金壹圓貳拾錢也	同 福原 楯殿
金壹圓貳拾錢也	同 内倉 治吉殿
金壹圓貳拾錢也	同 中村清兵衛殿
金壹圓貳拾錢也	同 沼部彌太郎殿
金壹圓貳拾錢也	同 宇野 博雅殿
金拾圓五拾錢也	同 日下部二葉殿
金拾圓五拾錢也	同 谷山 靜邦殿
金拾圓六拾錢也	同 名古屋山岸製材會社殿
金拾圓貳拾錢也	同 豊岡 本社殿
金貳圓貳拾錢也	新潟縣 高橋 大吉殿

金壹圓	同也	東京 小西 日喜殿
金拾圓六拾錢也	同也	名古屋 豊田南丁場殿
金貳圓貳拾錢也	同也	東京 横山 正三殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 宮下 きく殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 増子 酉治殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 大谷權次郎殿
金壹圓	同也	同 奈良縣 伊藤わか殿
金壹圓	同也	同 東京 出口馬太郎殿
金壹圓	同也	同 佐藤大太郎殿
金拾圓	同也	同 沼部彌太郎殿
金八圓四拾錢也	同也	名古屋 豊田南井工場殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 東京 本多 三郎殿
金五圓	同也	同 白井 勢市殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 大島 良平殿
金五圓	同也	同 森山 春吉殿
金拾圓	同也	同 山口 智光殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 水戸 前刀 實清殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 静岡縣 千葉 機外殿
金壹圓貳拾錢也	同也	同 東京 加藤重太郎殿
金壹圓貳拾錢也	同也	同 廣島縣 村上 信夫殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 東京 高橋福一郎殿
金貳圓貳拾錢也	同也	同 菊地 雄三殿

右難有入帳仕候也
財團法人統一團會計

清水龍山 守屋貫教 中谷良英
鈴木一成 榊原久遠 共編

内容見本呈上

新修 日蓮聖人遺文集

再版 改訂

科段 御遺文百廿余編(脚註入)

体裁 装幀

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

發行所

久遠閣

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

電話日本橋三三三七番
都立七座東京七二八〇六番

巻頭挿入ククリムアート寫眞版七葉
四六版 縦六寸二分 横三寸五分
紙數 千百十四頁

特製 總 皮 三方金

並製 總クロース 天金

函入最上美本

定價 特製 三圓八十錢
並製 二圓八十錢

送料 廿一錢

謹告

各位の渴望されて居りました故本多日生上人御撰述に依る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品がいよいよ清朝新活字を用ゐて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、便宜お願ち致します。此御本尊と要品があれば、子々孫々迄も信行上には百パーセント疑ありません。殊に要品は日蓮主義心髓たる本經祖書要文全部ありますから、自家用には勿論、布教用にも、施本用にも、洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰

法華經要品

並本經祖書要文集

壹部

改正定價

金四拾五錢

送料共

御本尊

大 特別用
中 普通小型佛壇用
小 懷中用

授與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ります。

勤行作法

壹部

金拾錢

送料共

百部以上御注文の時は御望に依り貴名刷込み致します。

統一定價

一冊 金貳拾錢 送料五厘
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢

注意

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和八年七月廿四日印刷納本
昭和八年八月一日發行

(第四百六十一號)

不許複製

編輯兼 發行所 磯部 滿事
印刷人 鈴木 日雄
東京市小石川區音羽町六ノ一七
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話基輪六〇二四番

發行所

財團法人統一團

東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
都立七座東京九四二〇番



目 次

聖	三首御詠義解(下)……………	日生上人
語	東西文化の本質的絶対差異を提唱せよ……………	木謙三
	釋尊の悲智に感孚して……………	磯部満事
解	放欄……………	
	二冊の本から……………	上田辰卯
	至誠の力……………	日比野妙鏡
	所感……………	北村旭三
	求道熱……………	み
	○本部團報並に各地教信	
	○寄附團費誌料領收	

第三十八年九月號

